

聖書箇所 マタイによる福音書 第8章 5節—13節

「さて、イエスがカファルナウムに入られると、一人の百人隊長が近づいて来て懇願し、『主よ、わたしの僕が中風で家に寝込んで、ひどく苦しんでいます』と言った。そこでイエスは、『わたしが行って、いやしてあげよう』と言われた。すると、百人隊長は答えた。『主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます。わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に《行け》と言えば行きますし、他の一人に《来い》と言えば来ます。また、部下に《これをしろ》と言えば、そのとおりにします。』イエスはこれを聞いて感心し、従っていた人々に言われた。『はっきり言うておく。イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。言うておくが、いつか、東や西から大勢の人が来て、天の国でアブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席に着く。だが、御国の子らは、外の暗闇に追い出される。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。』そして、百人隊長に言われた。『帰りなさい。あなたが信じたとおりになるように。』ちょうどそのとき、僕の病気はいやされた。」

イエス・キリスト当時のローマの百人隊長というのは、その勇猛果敢さにおいて、また指導力、統率力においてすばらしい人々だったといえます。最近、新聞に教員の指導力不足についての記事がありました。そのような点においても、日本の教員はローマの百人隊長に学ぶべきかもしれません。しかし本日の聖書箇所ではイエス・キリストは、百人隊長の指導力や統率力などを称揚してはおられません。この箇所の百人隊長は、自分の僕の病気を癒してほしいとイエス・キリストに願っています。この百人隊長は、イエス・キリストが病気を癒す力のあるお方であることを信じていたのです。もちろん、この百人隊長は自分が異教徒であるということを自覚していました。それは、「主よ、私の屋根の下にあなたが入ってくるには私はふさわしくありません（マタイ8章8節、ルカ7章6節）」という彼の言葉でわかります。マタイによる福音書8章6節は、この百人隊長をして「私の僕＝ギリシャ語ではパイス」と語らしめています。パイスは第一義的には「少年」とか「子ども」を意味する言葉です。マタイはそのつもりでこの言葉を用いていると思います。なぜなら彼はすぐ後の9節で「ドゥーロス（僕＝奴隷）」という言葉を使っているからです。だから、6節でマタイがわざわざ「パイス」という言葉を使ったのは意識してのことだと思われます。私は、新共同訳で僕と訳されている言葉を「子どものように大事にされていた奴隷」と解釈したいと思います。

さて、この「子どものように大事にされていた奴隷」の病気はどのようなものだったのでしょうか。マタイによる福音書8章6節はこの奴隷の病気が「パラルティコス（中風）」であり、その症状を「ひどく苦しんで寝ています」と報告していま

す。中風というとは老人の病気のように思われますが、これは元来、体の麻痺を表す言葉です。特に「ひどく苦しみ」との「苦しみ」と訳された「バサニゾー」というギリシャ語には元々、「拷問にかける」という意味があり、「痛み」に強調点があります。この少年奴隷は、体が麻痺して横たわり、拷問にかけられているごとく、ひどく痛がっていたのでしょう。それは、とても捨て置ける状況ではなかったのです。その点を際立たせようとするあまり、どう考えても不自然な記述になっております。私は、この百人隊長が困難も顧みず「子どものように大事にしていた奴隷」の癒しをイエス・キリストに懇願している姿から、この「子どものように大事にされていた奴隷」に対する百人隊長の愛の深さを思います。奴隷に対して愛の深い人を見出すのは難しいものです。奴隷がユダヤにおいてどんな扱いを受けていたかは、たとえば出エジプト記 20 章 17 節の「隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない。」という記述を見れば分かります。奴隷は、牛やろばの一つ手前に位置するだけの、主人の持ち「物」だったのです。このことは、イエス・キリスト当時の一マ世界においても変わらなかったようです。

マタイによる福音書 8 章 10 節でイエス・キリストは「イスラエルの中でこれほどの信仰を誰にも私は見出さなかった」と仰います。では「これほどの信仰」とはどんな信仰なのでしょう。

まず、イエス・キリストの権威ある言葉による癒しに対する、この百人隊長の単純で堅固な信仰でしょう。彼はマタイによる福音書 8 章 9 節で言っています。「ただ言葉で言ってください。すると私の僕は癒されます」。この「言葉」とは、単なる「言葉に過ぎない」というような言葉ではないでしょう。また、何か魔術のような力を持った言葉でもないでしょう。この言葉とは、イエス・キリストが病人を癒すという意志を表す言葉のことでしょう。「ただ言葉で言ってください」とは、「癒してやろうと意志して下さい」ということでしょう。言葉の命は、その元にある意志です。意志もないのに語られる言葉は、虚ろで無意味な騒音に過ぎません。事実、マタイによる福音書 8 章 13 節は、イエス・キリストが「行け、あなたが信じたようにあなたになれ」と仰ると同時に、「すると彼の僕は、その時に癒された」と記しています。イエス・キリストが癒そうと意志された途端に、その意志は成就したのです。この言葉の根源的な力を百人隊長は信じました。そして、この百人隊長にこのような確信を持たしめたのは、マタイによる福音書 8 章 9 節に説明されるような彼の経験です。曰く、「なぜなら、私も権威の下にある人間である。私の下に兵たちを持っていて、これに行けと私が言う。すると、彼は行く。また、他の者に来いと言う。すると彼は来る。また、私の奴隷にこれをせよと言う。すると、彼はする。また、私の奴隷にこれをせよと言う。すると、彼はする」。私は、この百人隊長の言葉に、自分の言葉通りに他人が動いてくれることに対する感動のようなも

のを感じます。私は、彼のこのような気持を分かる気がいたします。これは、多くの方が経験される場所であると思いますが、私もまた、幼児期に親に自分の言う通りにしてもらったことがある以外、その後、長い間、自分の言う通りに他人が動いてくれるという経験をしたことがありませんでした。ですから、こうして大学に勤めたりして、自分に部下らしい人が付けられて、何かをお願いしたりして、その通りにしていただくとき、ふと、びっくりすることがあります。それは、決して当り前のこととは思えないからです。

しかし、私は何よりも、「子どものように大事にされていた奴隷」へのこの百人隊長の愛の深さに、イエス・キリストは信仰を見ていると思います。その愛の深さが、ひいては、この百人隊長がイエス・キリストの癒しの力を単純明快に信じることに繋がったと思うからです。私はそのことを思うにつけても、高校時代にアルバイトをしていた米屋の奥さんが、私の卒業のときにしてくださったことを思い出します。私の家は、いつも申すとおり貧乏でして、高校を卒業して社会人になる私に背広を買い与えるなどということは思いもよりませんでした。その時、その奥さんは百貨店の洋服売り場に私を連れて行き、イージーオーダーで背広を仕立ててくれたのです。百貨店の店員に寸法を取ってもらいながら、私は複雑な気持ちで、心から喜ぶことが出来ませんでした。本当は母親にそのようなことをしてほしかったからです。しかし、今思うと、親も出来ないことをしてくださったのだと心の底から感謝の思いが湧いてきます。百貨店に連れて行って背広を買ってやるなどということは、わが子のように思っていなかったら出来ないことだからです。私は奴隷ではありませんでしたし、米屋の奥さんは奴隷主ではありませんでしたが、本日の箇所での百人隊長の愛の深さを学びつつ、思わずあの頃のことを思い出してしまいました。

更に私は、同志社大学の創設者新島襄のことを思います。以前、京都で開催されたキリスト教学校教育同盟の研究部会で新島襄のこと学んだからです。特に同志社大学神学部教授の本井康博先生のお話には深く教えられました。先生のお話によると、最近では同志社大学の学生の中にも「新島襄はクリスチャンだったのか」などという豪傑がいるそうです。それはともかく、新島襄は1864年6月14日、函館から密航します。上海で新島は別のアメリカ船(ワイルド・ローヴァー号)に乗り換え、やがてアメリカ東海岸に到着します。この「ワイルド・ローヴァー号」の船主がボストン有数の資産家で同時に熱心なキリスト教徒であることが新島に幸いしたようです。その船主の名前は、Alpheus Hardy【アルフェウス・ハーディー】と言いました。彼には、4人の息子がいましたが、夫妻して新島を実の子どものように、いわば「養子」として家庭に受け入れてくれることになりました。そのきっかけは、新島が密出国の理由を拙い英文で書いた作文だったそうです。夫妻はこれを読んで感激し、生活の面倒をすべて見ることを決意したというのです。そ

の後、その約束どおり、新島襄が日本に帰ってからも新島襄の生活費は、すべて、この「アメリカの父」アルフュース・ハーディーが出し続けてくれたそうです。アルフュース・ハーディーは文字通り新島襄のパトロンでした。パトロンという言葉は、父を意味するパーテルというラテン語から来ているのですから。新島襄がそのアメリカの父に建ててもらって住んだ京都の家が京都市指定有形文化財として残っています。見学してきましたが、あの時代にセントラルヒーティングの完備した和洋折衷の素敵な家でした。日本に帰ってからの新島襄は、そのように生活のすべてが親がかりでした。どうして、そのような愛を新島襄はアルフュース・ハーディーから受けることが出来たのでしょうか。彼にそれだけの値打ちがあったのでしょうか。あるいは運がよかっただけなのでしょう。あるいはそうかもしれません。新島襄の学力はそれほど高くは無かったようですから、その才能にアルフュース・ハーディーが惚れ込んだからとも言えません。後に同志社で新島襄から学んだ熊本バンドの学生、たとえば海老名弾正などのほうが英語はよくできたそうで、新島は彼等から侮られたとも言われているぐらいです。もちろん、もしこれが本当だとしたら、英語が少し出来るくらいで先生を馬鹿にした熊本バンドの人々も高が知れているということになります。そんなことはともかく、私はアルフュース・ハーディーが新島襄のアメリカの父となったのは、新島襄の才能を愛したというような価値愛に基づくことではなくて、本日の箇所の人隊長がその少年奴隷に対して持っていたような愛の故だと思うのです。

さらに、イエス・キリストに認められたこの百人隊長の信仰は、彼の謙遜にあると思います。その謙遜は、ここまで残しておいたマタイによる福音書8章8節冒頭の彼の言葉に示されています。その前の8章7節のイエス・キリストの言葉は、平叙文とも疑問文とも取れる言葉です。しかし、やはり私も多くの研究者と同じように、そして最近の岩波書店版新約聖書の訳に倣って、反語的疑問文として訳したいと思います。すると、このイエス・キリストの言葉は、「私が行って彼を癒すのか」となります。この言葉には、「癒すはずがないではないか」という含みを感じられます。それは、ローマの百人隊長が異教徒であったということを見ると、容易に領けます。ユダヤ人であるイエス・キリストが異教徒である百人隊長の家に入ってその僕の病を癒すなどということをしたら、イエス・キリストは異教徒の穢れを身に受けてしまうことになります。この百人隊長は、イエス・キリストにとってもその僕を癒してもらおうような立場にはない異教徒であったのです。しかし、そうであったとしても、彼自身がマタイによる福音書8章7節で、「主よ、私の屋根の下にあなたが入って来るには私はふさわしくない」と言っているのは実に著しいことだといわなければなりません。ここに彼の本質的な謙遜があります。これは、自分には救われる値打ちがない、という告白です。この言葉を受けて、イエス・キリストは、マタイによる福音書8章10節後半から12節にかけて

おっしゃいます。「まことにあなた方に私は言う。イスラエルの中で、これほどの信仰を私は見出さなかった。また、あなた方に私は言う。すなわち、多くの者らが東また西から来る。そして、天国で、アブラハムとイサクとヤコブと共に、食事の席に着く。しかし、国の子らは外の暗黒に投げ出される。そこで、泣き叫びと歯ぎしりがある」。これはすなわち、異教徒こそ救われるのだと言っておられるのです。しかし、イエス・キリストは何もないのにこう仰ったわけではありません。百人隊長の根本的に謙遜な告白と、イエス・キリストの救いの力に対する単純でしっかりした信仰に感動して、思わずこう仰ったのです。それほど衝撃をイエス・キリストの心に与えるほど、この百人隊長の謙遜は強烈だったのです。

学校でも、正規の学生よりも聴講生が熱心に講義を聴いたりいたします。自分は学ぶ資格があるなどと思っている人間は、学ぶ姿勢に迫力がありません。教えられることに対する感謝もありません。教えてもらって当然などという人間は、目を開けて教室に座っていても、或は本当に目を閉じている人もいますが、「外の暗黒に投げ出され」ているに等しい状態にあります。私たちにとっても大切なことは、自分がクリスチャンだ「などと思ってもみ」ないことでしょう。私たちは教会で、常に教室における聴講生のようにでありたいものです。そんな聴講生のような信仰者は、本人が幸せです。なぜなら、そのような人は、常に水が乾いたスポンジにしみこむように、その心にイエス・キリストの福音がしみこんでゆくからです。

最後です。有名なコリントの信徒への手紙一の13章13節はこう言います。「このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは、愛である」。信仰は言わずもがな大切です。しかしそれは、いわゆる信仰ではない、ということでしょう。自文の持ち物のような少年奴隷を、わが子のように愛して親兄弟のような気持ちでその病の癒しをイエス・キリストに懇願した百人隊長の愛こそが、最も大切なものだということでしょう。それこそが、言わば、「愛なる信仰」だと思いうわけでございます。

祈り

神様、私たちはあなたから十字架の血潮の愛を注いでいただきました。私たちが本日の箇所のような愛に生きることが出来ますように、導いてください。この祈り、主イエス・キリストのみ名によって御前におささげいたします。アーメン。